

知床・根室海峡海域におけるシロイルカ（ベルーガ） *Delphinapterus leucas* の出現記録

佐藤 晴子¹・市村 政樹²

1. 102-0081 東京都千代田区四番町 4-3-605 2. 086-1631 北海道標津郡標津町北 1 条西 6 丁目 1-1-1, 標津サーモン科学館

The Sighting Record of Beluga (White Whale) *Delphinapterus leucas* in Shiretoko–Nemuro Strait Water, Eastern Hokkaido, Japan

SATO Hal¹ & ICHIMURA Masaki²

1. 4-3-605 Yonban-chō, Chiyoda-ku, Tokyo 102-0081, Japan. *DZF14072@nifty.com* 2. Shibetsu Salmon Museum, 1-1-1 W6N1, Shibetsu, Hokkaido 086-1631, Japan

はじめに

シロイルカ（ベルーガ）*Delphinapterus leucas* は、主として北緯 50–80 度の北極圏と亜北極圏に分布する鯨類で、出生時の体色は濃灰色だが、成長するにしたがい全身白色になり、背びれがなく、オトナのオスでは体長約 5 m、メスで約 4 m に達する（笠松ら 2009; ジェファソンら 1993; Jefferson et al. 2008）。

本種は、餌の捕獲機能に関係があると考えられる「くちびる」を動かしたりすぼめることができ非常に表情豊かであること、頸椎が結合せず遊離しているために首を動かすことができることや、毎年「脱皮」することなど、鯨類の中では特異な生態的特徴を持つ。これまでに 29 の個体群が確認され、中には絶滅が危ぶまれる小型個体群の存在も知られている（Jefferson et al. 2008）。

日本列島の沿岸海域はシロイルカの主たる分布域より南方に位置する。ところがまれに、本種がなんらかの理由で日本の沿岸海域に迷い込んだ、あるいはしばらく滞留したと考えられる出現例があり、国内では北方の北海道の沿岸海域、特に北海道東部の知床・根室海峡沿岸にもっとも多い。

本報告では、国内における鯨類のストランディング（座礁、漂着、混獲や日本沿岸海域における

めずらしい目視事例など）情報を記録している日本鯨類研究所のストランディング・データベース（以降、日鯨研データベースと略す）および国立科学博物館の海棲哺乳類ストランディング・データベース（以降、科博データベースと略す）に登録された記録に 2010 年現在データベース未登録の記録を加え、近年、著者らによる本種の頻繁な目視観察がある知床・根室海峡を中心に、国内沿岸海域での本種の出現記録を紹介する。

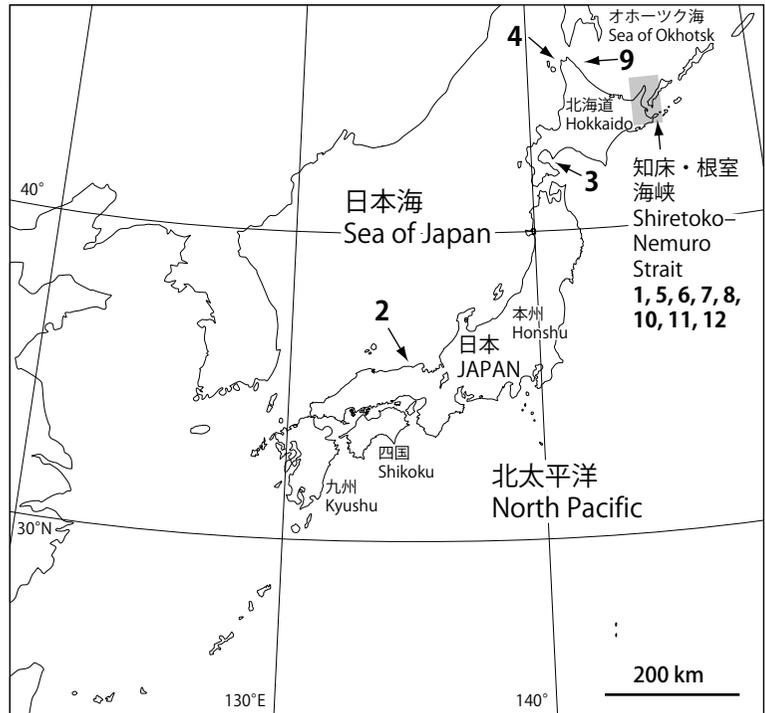
材料と方法

日本の沿岸海域におけるシロイルカの出現記録について、日鯨研データベース（日本鯨類研究所。ストランディングレコード。日本鯨類研究所。http://icrwhale.org/zasho3.htm, 2010 年 12 月 15 日閲覧）および科博データベース（山田格（監）. 海棲哺乳類ストランディングデータベース。国立科学博物館。http://svrsh2.kahaku.go.jp/drift/. 2010 年 12 月 15 日閲覧）から得られる情報に加え、著者らの野外調査や聞き取りで得られた情報を用いた。

上記のうち、各著者が情報を得るために行った調査は次のとおりである。

著者のうち佐藤は、1995 年来、道東の知床・根室海峡海域に出現する鯨類の分布生態の長期モニ

図1. 日本沿岸におけるシロイルカ *Delphinapterus leucas* の出現分布. Fig. 1. Distribution of beluga *Delphinapterus leucas* occurrences in Japanese coast.



タリングを行う中で関係者への聞き取りまたは直接観察を行った。ほか、インターネット上で公開されている情報を探索した。

著者のうち市村は、勤務する標津サーモン科学館における展示用魚類の収集活動を通じ、協力を受けている地域漁業者から根室海峡中央部・標津町沖海域での本種の頻繁かつ断続的な目視情報を得、2009–2010年に直接観察、写真や動画撮影を行った。

すべての目視記録のうち、日鯨研と科博データベースに未登録のケースにおける種の判定は、新聞記事に掲載された写真を含め画像が入手できたものについては専門家による同定や意見を求め、あるいは著者らが本種の外見上の特徴を確認し、画像・標本とも存在しないケースについては直接取材した研究者の判断に従った。

結果

図1に、日本におけるシロイルカの出現位置の分布を、表に出現記録の詳細を示した。図1に示した数字は、表の番号に対応している。

計12件の記録のうち90%以上の11件が北海道周辺のすべての海（日本海、北太平洋およびオホーツク海）で記録され、約66%の8件が北海道東部の知床・根室海峡海域（図2）沿岸での記録である。

これらのうち、目視位置未確認の表-No. 8の記録以外は、すべて水深100 m以浅の海域であった。

以下、知床・根室海峡海域におけるシロイルカの出現記録のうち、著者らが直接観察、または聞き取りを行ったもの（表-No. 5–7, 10–12）およびインターネット上で収集したもの（表-No. 8）についての詳細を示す。

1. 2001年9月（表-No. 5）

宇仁（2006）は知床半島の北西側、すなわち斜里町側におけるシロイルカの出現は、2001年にウトロ付近で漁網にかかり死亡した1例のみと報告している。この記録はサケ定置網での混獲によるものであり、当時毎日揚網していた漁業者の観察によると、9月26日に発見された死体は新鮮な状態で、網の中にサメは見当たらなかったがシロイル

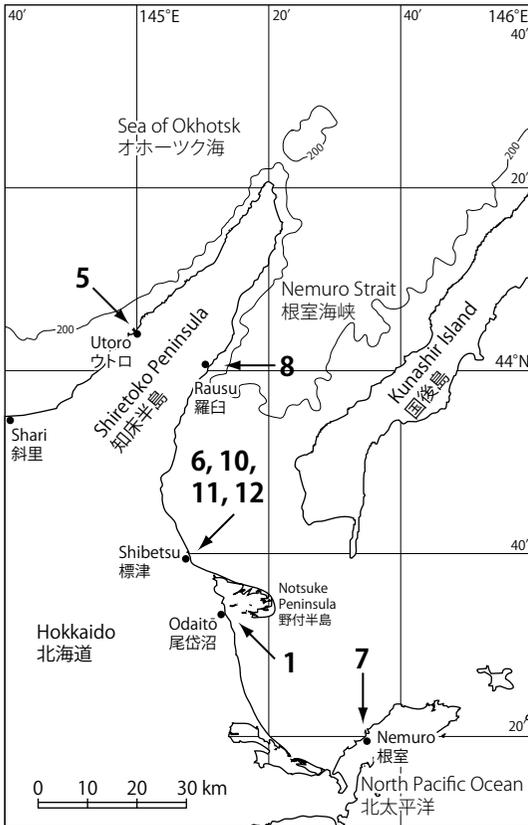


図2. 北海道東部の知床・根室海峡海域におけるシロイルカ *Delphinapterus leucas* の出現分布。Fig. 2. Distribution of beluga *Delphinapterus leucas* sightings in Shiretoko–Nemuro Strait water, eastern Hokkaido, Japan.

カの身体表面に「サメの歯型が点々と丸く」ついており、死体は漁業者によって海中に遺棄され、標本や写真は残されていない(宇仁義和私信)。

2. 2004年5月(表-No. 6)

根室海峡中央部、標津郡標津町標津の標津川河口付近から、野付半島の付け根に近い同町茶志骨(ちゃしこつ)にかけての、水深10m未満のきわめて浅い岸寄りに、明るい白色であったため成獣と推定されるシロイルカ(図3)が現れた。当初、標津漁港を母港とするウバガイ(ホッキ) *Pseudocardium sachalinense* 漁業者らが発見し、佐藤ほかに情報もたらされた。佐藤は標津漁港の防波堤上から数回(数日)シロイルカの遊泳を発見観察したが、標津川河口沖で索餌している様子で

あった。水面上の観察に限定されるが、この個体に目立つ外傷はなく、弱っている様子もなかった。性別は不明、およそ2週間標津沿岸で目撃された後、消息を絶った。

3. 2005年9月(表-No. 7)

根室海峡南部の根室湾側、根室市琴平のサケマス定置網による混獲で、シロイルカは生存していた。この定置網を展開する漁業者の湊栄一氏とその家族によれば、このとき2個体一緒に入網し、1頭は純白、もう1頭は他方の半分かそれ以下の大きさの濃い灰色で、母子ペアと推定される。佐藤は2005年10月6日に実施した聞き取りに際し、関係者が定置網の中の水面に浮上した2頭を撮影した画像を入手確認している。

9月22日の早朝、網の中を泳ぐ親子のシロイルカを発見した漁業者らは、漁労後、2頭を救出するため再度定置網に赴き、3時間を超す積極的な努力の結果、無事網の外へ逃がした。その後の2頭の話は不明である。

4. 2006年4月(表-No. 8)

根室海峡北部の羅臼町沖の海面付近を遊泳するシロイルカの写真画像が、第一管区海上保安本部のウェブサイト、「羅臼沖で白鯨(ペルーガ)発見!平成18年4月10日、釧路航空基地MH561がしょう戒中に撮影」と紹介されている(第一管区海上保安本部、いちかんスナップ3、第一管区海上保安本部、<http://www.kaiho.mlit.go.jp/01kanku/snap/snap03.htm>)。個体の性別およびその後の消息は不明である。

5. 2008年5–8月、2009年3–8月、2010年1–8月(表-No. 10–12)

いずれも主に根室海峡中央部・標津町の標津から野付半島付け根付近の同町・茶志骨にかけてのきわめて岸付近で、数箇月にわたり断続的かつ頻繁に単独のシロイルカ(図4)が観察されている。この海域で小型定置網漁業を営む漁業者らが発見したものである。

これらのケースで観察されたシロイルカは性別

表. 日本沿岸に出現したシロイルカ (ペルーガ) *Delphinapterus leucas* の記録. Table . The Record of Belugas *Delphinapterus leucas*. Occurred in Japanese Coast.

番号 Number	場所 Location	年 Year	月 Month	群れ数 Groups	群れサイズ Group size	記載 Description	日鯨研登録番号 ^a ICR database number ^a
1	北海道野付郡別海村 (当時) 尾岱沼 Odaïrô, Betsukai, Notsuke-gun, Hokkaido	1958	10	1	1	座礁, 生存. 後, 捕鯨者により捕獲された. Stranded, alive. Then captured and killed by the whalers.	RO-377
2	京都府竹野郡網野町 Amino, Takeno-gun, Kyoto	1979	10	1	1	混獲, 生存. 短期間飼育された. Bycaught, alive. Then kept in captivity briefly.	RO-038
3	北海道室蘭市室蘭港沖 Muroan, Hokkaido	1991	5-8	1	1	生存. 数ヶ月間, 断続的に滞留, 地域ホエールウォッチング関係者らが観察. Living. Observed intermittently for several months by the local whale watchers and others.	O-250
4	北海道利尻郡利尻富士町鷺泊 Oshidomari, Rishiri-fuji, Rishiri-gun, Hokkaido	1999	5	1	1	生存. 稚内水産試験場の調査船が試験運用中の水中ロボットカメラが, 遊泳中の個体を撮影. Living. Underwater video footage was captured by the ROV of Wakkanai Fisheries Lab.	EX-047
5	北海道斜里郡斜里町ウトロ Utoro, Shari, Shari-gun, Hokkaido	2001	9	1	1	混獲, 死亡. サケ定置網. 新鮮な死体にサメ由来らしい菌型あり. 死体は海中投棄 ^b . Bycaught, dead. The fishermen noticed toothmarks likely of a shark on a fresh carcass (abandoned) ^b .	-
6	北海道標津郡標津町標津-茶志骨 Shibetsu, Shibetsu-gun, Hokkaido	2004	5	1	1	生存. 2週間ほど滞留し, 漁業者ほか頻繁に観察. Living. The fishermen and others observed the animal frequently for a couple of weeks.	EX-096
7	北海道根室市根室 (根室海峡側) Nemuro, Hokkaido	2005	9	1	2	混獲, 生存. 定置網に親子1組混入, 漁業者が生かしたまま解放に成功. Bycaught, alive. A pair of mom-calf were bycaught, then released safely by the fishermen.	O-1820
8	北海道日梨郡羅臼町 Rausu, Menashi-gun, Hokkaido	2006	4	1	1	生存. 第一管区海上保安部-釧路航空基地航空機が発見, 撮影. ウェブサイトに掲載. Living. An aircraft of Japan Coast Guard photographed an individual (The information on their web site).	-
9	北海道宗谷郡猿払村猿払 Sarufutsu, Soya-gun, Hokkaido	2006	6	1	1	混獲, 死亡. 小型定置網での混獲個体. 国立科学博物館が調査. Bycaught, dead. Investigated by the researchers.	O-1981
10	北海道標津郡標津町標津-茶志骨 Shibetsu, Shibetsu-gun, Hokkaido	2008	5-8	1	1	生存. 5-8月, 漁業者らが, 断続的に小型定置網付近を遊泳する姿をしばしば目撃. Living. The fishermen observed the animal near by set nets frequently and intermittently.	-

表. 続き. Table . Continued.

番号 Number	場所 Location	年 Year	月 Month	群れ数 Groups	群れサイズ Group size	記載 Description	日鯨登録番号 ^a ICR database number ^a
11	北海道標津郡標津町標津-茶志骨 Shibetsu, Shibetsu-gun, Hokkaido	2009	3-8	1	1	生存. 3-8月, 漁業者ほかから, 断続的に小型定置網付近を遊泳する姿を頻繁に観察. Living. The fishermen and others observed the animal near by set nets frequently and intermittently.	EX-168
12	北海道標津郡標津町標津-茶志骨 Shibetsu, Shibetsu-gun, Hokkaido	2010	1-8	1	1	生存. 1-8月, 漁業者ほかから, 断続的に小型定置網付近を遊泳する姿を頻繁に観察. Living. The fishermen and others observed the animal near by set nets frequently and intermittently.	-

^a 日本鯨類研究所のストラクチャリング・データベースに2010年現在までに登録されたケースで, その登録番号を示す. The cases were listed up into the Stranding Database of the Institute of Cetacean Research, Tokyo, Japan. And their database ID numbers as of 2010.

^b 宇仁義和 (未発表) による. Based on unpublished data provided by UNI Yoshikazu.

不明, その行動, 雰囲気, 大きさや色合いなどから3年連続断続的に同一個体が出没していると推察される. 市村を含む複数の観察者の証言から, この個体は, 年を経て「成長」しているらしく, まだ白色になっておらず灰色で, 2010年には少なくとも推定体長3m (最大推定体長5m) に達している. いくつかの特定の定置網を好んで訪れるようであり, 行動に日周期性があり, また, 非常に人懐こく, 2010年には小型船舶からヒトが手で体の部分に触れることを許容 (図5) するまでになった.

市村は漁業者が運用する小型船舶から, 少なくとも2009年7月10, 13, 26日と, 2010年4月27, 29日, 6月10日, 7月3, 7, 12日に観察と写真や動画撮影を行っている.

No. 10-12のケースをもっとも詳細かつ間近に観察し続けている, 標津町の沿岸定置網漁業者である小野瀬稔之氏に対し, 2010年12月7日に佐藤が行った聞き取りの内容を以下に示す.

「2008年5月からベルーガを見るようになり, この年は8月まで, 出漁のたびにしばしば見かけた. 2009年は3-8月に, 出漁すると毎回のようには現れた. 2010年では1月18日頃から2月10日までと, 3月20日頃から8月まで, 出漁のたびに頻繁に現れた.

[ベルーガの: 著者注, 以下同じ] 姿を見かけないとき, 仲間の漁師に [個体の] 消息を尋ねると, 標津町沿岸から野付半島の中央くらいまでの他の定置網付近で目撃されていたが, 羅臼や尾岱沼 [別海町] で見かけたという話しはまったく聞いていないので, 海峡の浅瀬を伝い, 国後島と標津とを行き来しているのではないかと考えている.

ベルーガがやってきた当初, 今 [2010年末現在] より体がやや小さく, 定置網の浮きに体を擦り寄せ, ロープで体をこすったり, 作業船に体を寄せたり, 船底をくぐりながら水面上の人間を見上げるしぐさをしていた. どうやら, 小型船のエンジン音やスクリューが立てる泡の音を聴きつけて寄ってくるようだ.

2010年1月になると, 水面上に頭を出すようになり人慣れが進んだ. 小型船から手を伸ばすと, 頭をなでさせ, 舌を出して触れさせるようにな

図3. 根室海峡中央部・標津町沿岸を遊泳するシロイルカ (2004年5月19日, 佐藤晴子撮影). **Fig. 3.** A beluga is surfacing at near shore, Shibetsu, along the central coast of Nemuro Strait (May 19, 2004. Photograph by SATO Hal).



図4. 根室海峡中央部・標津町沿岸に浮上するシロイルカ (2009年7月13日, 河口真梨撮影). **Fig. 4.** A beluga is swimming in the coast of Shibetsu, central Nemuro Strait (July 13, 2009. Photograph by KAWAGUCHI Mari).



り, よく響く鳴き声を出すなど, まさに人間と遊ぶためにやってきている感じだ. 試しにホッケや貝を口の中に入れたことがあるが, いずれも吐き出し, 食べなかった. しかし, 見ているとだんだん太ってくるので, 自分でよく[餌を]食べていると思う. 定置網の構造を理解しているようで, 自分から[網の]中に入って, また外に出ることもできる。」

なお, この個体のその後の消息は, 2010年末現在不明である.

考察

シロイルカは群集性で, ふつう15頭以下の群れをなし, さまざまな魚類, イカやタコ, 甲殻類, ベントスから表層性の動物プランクトンにいたる多様な食性を持つ (笠松ら2009; ジェファソンら1993; Jefferson et al. 2008).

これまで国内で記録された本種は, 母子ペアの1例(表-No.7)を除きみな単独なので, おそらく何らかの理由で群れからはぐれ, 本来の分布域より南方に迷入してしまったものと考えられる. ゆえ

図5. 小型漁船の船体に身を寄せ、人懐こく頭部を水面上に持ち上げるシロイルカ(2010年7月12日, 河口真梨撮影). **Fig. 5.** A very friendly animal approached to the fishery skiff, pokes up its head and watches up to the people curiously (July 12, 2010. Photograph by KAWAGUCHI Mari).



に、2000年代に少なくとも6件と国内最多の本種の出現を記録している知床・根室海峡海域においても、本種を「普通種」に含むことは不適當であろう。

一方、国内で本種の発見がもっとも多い北海道沿岸海域において、表-No. 3と根室海峡における表-No. 6, 10-12の例では数週間から数箇月にわたり、同一と推定される個体が滞留しており、索餌様の行動が観察されたり(表-No. 6)、小型定置網付近に居つく(表-No. 10-12)、1シーズンの観察で個体の体格が変化するという証言がある(表-No. 12)など、環境に順応し、これらの比較的浅い海域で不自由なく捕食し生存することがあるらしい。

北極圏から亜北極圏に分布するシロイルカの、日本にもっとも近い個体群は、ロシア連邦の極東域、プリモルスキー州(沿海州)の北緯50度以北のアムール川河口付近からシャンタル群島付近、およびマガダン州北部のオホーツク海に分布する(ジェファソンら1993; Jefferson et al. 2008)ため、これらが日本沿岸に出現する本種の由来である可能性が考えられる。将来、遺伝学的調査などでの検証が期待される。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、貴重な証言や資料を提供して下さった方々をここに記して心より御

礼申し上げる。安藤ゆう子氏(北海道釧路市), 石川創氏(日本鯨類研究所), 宇仁義和氏(東京農業大学), 小野瀬稔之氏(北海道標津郡標津町), 河口真梨氏(野付半島ネイチャーセンター), 湊栄一氏(北海道根室市)。

引用文献

宇仁義和. 2006. 知床周辺海域の鯨類. 知床博物館研究報告, 27: 37-46.

笠松不二男・宮下富夫・吉岡基. 2009. 新版鯨と

イルカのフィールドガイド. 148 pp. 東京大学出版会, 東京.

ジェファソン T. A. ・レザウッド S. & ウェバー M. A. 1993 (山田格訳 1998). 海の哺乳類 FAO 種同定ガイド. 336 pp. NTT 出版, 東京.

Jefferson T. A., Webber M. A. & Pitman R. L. 2008. Marine mammals of the world: a comprehensive guide to their identification. 573 pp. Academic Press, UK.